

## 西表島農業ボランティア体験記 後編

生物資源開発学科 2年 H.K

### ・生き物探し

農業のお手伝いがメインですが、どんな生き物がいるのか探索するのをとても楽しみにしていました。西表島入りする前の晩には、石垣島で海岸を歩き通すということと一緒に行動していたIさんとしたため、肝心の西表島上陸の時は寝ぼけながらでした。なぜわざわざ夜に探索をしたのかというと、夜になってあたりが暗くなり始めると、眠る生物がいる一方で、明るい昼間では姿を隠していた生き物たちが姿を現し始めてまた違った生き物を見つけることができるからです。二人で足元をライトで照らしながら歩いて、どんな生き物がいるのか探索をしました。こういうのを夜探(やたん)と呼ぶそうです。先輩方から教わりました。長いフライトの後、やっと着いた宿でゆっくりすることもせず、何時間も一緒に歩いてくれる友達はそうそういないと思います。この学科に所属していて良かったと思うことの1つです。

寝不足のまま西表島に着いてさっそく驚いたことがあります、それはワシが至る所にいることです。関東じゃあまり見られない野生の猛禽類が電柱の上やガードレールの上に普通にいるのです。カンムリワシといって、八重山諸島に生息する個体群は日本固有の亜種とされています。カラスより目にするので、だんだんとありがたみが無くなってきますが、環境省のレッドリストでは絶滅危惧種に指定されている貴重な鳥です。平地性の種類で、水田や畑が主な採餌場所になっているためよく目にすることができたのだと思うの



ですが、近年では水田の放棄や土地開発によって採餌場所が減少しています。こんなに自然が豊かなら、遠くに見える山手にもいるのだらうと思ったのですが、私たちがそうであるように、自分の生態に合った生息場所がそれぞれあるというのは当然だと思いました。身近にいる生き物が絶滅に瀕しているとは思いますが、ネットで調べてみるとボランティアによる保護活動や

生息数の調査などが行われていたりしています。皆さんの地域ではどうでしょうか？

住宅や街灯の少ない西表島では夜になると真っ暗になります。ライトで前を照らしながら歩いてきた道を振り返ると、横を通ったはずの標識や木々が全く見えなくなっていて、もしここで電池が切れたらと考えて冷や冷やしました。ですが、空を見上げると綺麗な天の川が流れていて、プラネタリウムのような光景が広がっていました。それに、暗闇に紛れて出会える生き物もたくさんいたので、時々立ち止まりながら歩きました。次の日が休



日のときは、IさんやHさんと山道を夜探しました。山道は車一台が通れるくらいの幅しかなく、人通りもほとんどないため、周りに生えている木々の落ち葉が堆積していました。そこで気を付けなくてはならないのがハブです。西表島に生息するのはサキシマハブという種で、ハブの中では体は小さく、弱毒性のヘビです。地元の人によると、噛まれた知り合いは翌日には仕事に

復帰していたらしいです。ですが、島には病院が多くないですし、何より毒蛇には噛まれたくないので、落ち葉に紛れてうっかり踏んだり、驚かせてしまわないよう細心の注意を払って歩きました。そんな中、横からいきなり飛び出てくるものが出て、ハブ！？と思ったらカエルだった、なんてことが結構ありました。私の地元では夜になるとコオロギの鳴き声がたまに聞こえる程度ですが、西表島ではサキシマヌマガエルなどのカエル類やコノハズクなどの鳴き声が響いていて新鮮でした。今ではコンクリートの道路と住宅街が当たり前になっていますが、開発が進む前の水田や畑だらけだった頃は、夜の暗闇や野生動物の存在がもっと身近にあり、自然に対する畏怖の念も強かったんだろうなと思いました。



ヤエヤマオオコウモリ



サソリモドキ

#### ・センサーカメラ調査

大浜農園では近年、イリオモテヤマネコによる鶏舎の食害に悩まされているそうです。以前、鶏卵を販売していたそうなのですが、農園にイリオモテヤマネコが訪れるようになってから、日に日にニワトリが食べられていくようになり、一時期は全滅してしまったほどでした。少し前にまた再開し、私が来た時にはもう少しで卵を産めるまでに育ったニワトリたちがいました。前編でも述べましたが、イリオモテヤマネコは絶滅危惧種に指定されている貴重な動物です。また、西表島では生態系の頂点に位置し、重要な役割を果たしています。そんな動物を駆除するわけにもかないので、どうやったらニワトリが襲われずに済むのか考

えるために、本当に犯人はイリオモテヤマネコなのか、どこからどのくらいの数の個体が来るのか、侵入経路はどこなのか等をセンサーカメラを設置して調べることにしました。

そしてある朝、いつものように鶏舎の様子を見に行くと、あたりに羽が散乱し、無残な姿になったニワトリが数羽いました。来たかと思い、カメラのデータを確認してみると、やはりイリオモテヤマネコが映っていました。鶏舎の周りをうろついては、時々網をたたいてニワトリを驚かせたりしていました。その後も何度かカメラに映る姿が確認できたものの、肝心の侵入する瞬間や襲う瞬間が記録できなかったため、疑問が残る結果となりました。しかし、頻繁に来ていたり、保護観察されていることを表す発信機付きの首輪を装着しているヤマネコが確認されたこと等の収穫もありました。

本来、イリオモテヤマネコの食糧は野生のトカゲやヘビ、コオロギ、鳥類等の様々な動物です。ではなぜ餌資源が豊富にある西表島で、農園のニワトリを狙うようになったのか、それは正確には分かってはいません。しかし、おそらくはイリオモテヤマネコ保護のために使用された誘引物が鶏肉だったからだと聞きました。ニワトリの味を占めたヤマネコが、栄養価が高く、狩りやすい農園の鶏舎を狙うのはなんだか納得できます。また、発信機付きのヤマネコが確認できたこともあって、事実なのかもしれないと思っています。

保護・保全活動は地域住民の理解と協力があってこそなので、この出来事を通してその難



しさを改めて痛感しました。絶滅危惧種のイリオモテヤマネコの元気そうな姿が見られてうれしい反面、短い間ですが、愛情をかけて育てたニワトリの無残な姿を思い出すと、複雑な気持ちにさせられます。それは農園の方も同じで、困ったものだと言いながらも、親戚の子が考案したんだよと、イリオモテヤマネコのマスコットを見せてくれたり、以前瀕死のイリオモテヤマネコを救護しようとしたけど助からなかったと、残念そうにしていた姿を見ると、やはり愛されている動物なんだなと思います。だからこそ、地域住民が笑顔で普段の生活を送りながら、保護・保全活動を行うことは大切だと思いました。そのためには、生物多様性の観点だけでなく、地域住民のその生物に

対する思いなどにも目を向けることが重要なのではないかと思います。

#### ・最後に

大浜農園の方々には本当にお世話になりました。一日の作業が終わった後も、一緒にキャンプファイヤーや夜釣りをしてくれたり、休日には農大生が経営している農園があるからと言って連れて行ってくれたりとお手伝いの身に余るような待遇でした。また、西表島特

有の伝統行事にも参加させていただいたり、とても貴重な体験ができました。

しかし、日本の南端にはこんなに素晴らしい自然や人、慣習があるということを知れた一方で、島民に近い環境で過ごせたことで見えた西表島の現状もあります。お手伝いを通して出会った島民の方々の職業、年齢、経歴等は多様で、それぞれ違った問題や不安を抱えていました。これらに向き合うためには、もっと広い視点や知識が必要だと改めて感じさせられました。なので、大学での勉強や人間関係だけではなく、大学以外の出会いも積極的に求めていきたいです。

そう思った矢先に、新型コロナウイルスの影響で外出自粛を余儀なくされてしまったのは残念ですが、同じような志を持った学生や社会人のネットワークがたくさんあります。それらを活用して、新しいことを学んだり、逆に学んだことを伝えるのも楽しいです。また、一人で本を読んで、ゆっくり思索するのも今だからこそできることだと思います。そして、また自由に外出ができるようになったら様々な場所に行ってみたいですし、今度は違う時期の西表島を見てみたいです。最後に、なるべくまとめたつもりですが、書いているうちにいろいろ思い出して長くなってしまいました。ここまで読んでくださりありがとうございます。

